

第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

父の昔話

浅野 憲治・愛知県尾張旭市

十年前、父から衣料店を引き継ぎましたが、この数年、郊外型の大型店舗の進出や全国チェーンの専門店が開店したりして、売り上げは減る一方です。加えて、近所の八百屋さんや花屋さん、雑貨屋さんが相次いで閉店し、昔は賑わっていた商店街もシャッターを閉めたままの店が増え、客足はますます遠のくようになりました。商店街としても閉店した跡地を駐車場にしたり、通路をカラーレンガで装飾したり、努力はしましたが、道路幅まで広げることができず、車社会の時代の流れに取り残されているのが現状です。

我が家でも、そろそろ見切りをつけて出直したほうが、将来性のない店をこのまま続けるよりはよいのかもしれないと思い、数年前から入退院を繰り返している九十歳になる父に思い切って相談しました。父は、私の話す厳しい現状に、黙って聞き入っていました。

このまま続けては、閉店する時、多額の負債を背負ってしまうことになるかもしれない。今なら、その負債もなく、再出発が楽である。見切りをつけるなら今であるということ、できるだけやさしい言葉で、私は話しました。最後に、父から譲り受けた店をこんなふうにして申し訳ないと、心から謝罪しました。

一時間ほど黙って聞いていた父は、私が話し終えるのを待って、昔話をしてくれました。その話は、父が衣料店を開店した、ようやく戦後の混乱が終わりはじめた頃の出来事です。

夕方、小学校の高学年と思われる少年が古い学生服をもって、「修繕をお願いします」

と、言ってきました。合成繊維の安い品物で、金具も外れ、ところどころ、破れています。父は、その古い学生服を一目見て、とても修繕は無理だと思ったそうです。その古い学生服は、年代物で、すっかり黒びかりをし、変色していました。少年の身なりや態度を見た父は、何か訳がありそうだと思い、やさしく声をかけ、お茶とお菓子を勧めながら事情を聞き出しました。

少年の話によると、彼の家は父親が戦死し、母親が食堂の手伝いをしながら、彼と姉の二人を育てているとのことでした。当然、家は貧しく、この学生服も母親が近所の中学を卒業した子供のいる家を訪ね歩き、手に入れたもので、今度、中学生になる少年が使うことになったとのことでした。中学生になると、制服は学生服にかわるから、どうしても必要となり、母親がやっとの思いで手に入れたものでした。

私の父も貧しさの中で育ち、丁稚からのたたき上げで、やっとな自分の店を持つことが出来

たという苦勞人で、少年の気持ちはよくわかりました。父は倉庫の中から、新品ではないけれど、まだ充分使用に耐えられる学生服を持って来て、少年に

「これを使いなさい」

と手渡したそうです。

新品の学生服ではなく中古の学生服を渡したのは、少年と少年の母親に無用な気を遣わせないようにと願ったからです。

そんなことがあってから二十年近くが経った頃、立派な紳士が店に突然入ってきました。そして、

「あの中古の学生服をいただいた少年が私です」

と、自己紹介をした後、お金の入った封筒を差し出したそうです。

紳士は、今では弁護士になり、故郷で行われた母親の七回忌の法要に出席した帰りでした。たまたま商店街を歩いていた時、父の衣料店を見つけて、あの出来事を思い出したのです。

そして、どうしてもお礼を言いたくなり、店へ入ってきたのです。あの学生服のお蔭で中学時代を楽しく過ごすことができ、その後、弁護士にもなれたとのことでした。

父は、その時、衣料店をしているだけでも、商品をとおして、一人の人の人生を変えるほどの影響力を持っていることを実感したそうです。真心を持って長く商売を続けていれば、本人も思いもよらないところで社会に貢献できるものだと思ったのです。

父は紳士のお金を使ってしまうことがもったいなくて、ポケットマネーを合わせ、社会福祉協議会に寄付したそうです。

この昔話を話し終えた父は、それ以上何も言いませんでした。しかし、私はもう少し、細々ながらもこの店を続けてみようと思心しました。時代は変わるものであり、高齢化社会が到来すれば、車を利用しない老人が増え、近所の商店街に客足が戻ってくることもあるのではないかと夢を見ながら。

最近、商店街では、古い店を改装し、若者たちが業態を変え、新規に商売を始めるケースが見られるようになりました。